

「7冊借りる」

坂井 重成

中2の頃まで馬出町に住んでいました。郵便局の隣の図書館のことも覚えてます。革靴の人が歩くと、大きくゴトゴトと音がしました。公園下の図書館は開館イベントに行きました。レファレンス室でケーキを食べました。そのえび茶色の図書館で、今の私の読書習慣を養ってくれた同級生との出会いがありました。小中高と同じ学校に通いました。

彼は「上限7冊必ず借りる」という決まりを自分に課していました。私たちは小説、新書ノベルス、文庫、児童文学と文学の書架を歩き回りました。彼から最も影響を受けたのはSF文学でした。あらすじを上手に話してくれる彼は憧れでした。

その彼は今、漫画家の乃木坂太郎として活躍しています。

「私の八月十五日」

佐野邦子

昭和二十年八月十五日、私は国民尋常小学校一年生。農閑期で、隣の家の姉さんも婚家から里帰りし、竹藪に面した縁側で友達と楽しそうに繕い物をしていた。その縁側に今日だけはラジオが置かれていた。

正午近く、緊張した面持ちで男

衆が集まってきた。しばらくしてラジオから聞き慣れぬ言葉がとぎれとぎれに聞こえてきた。男衆を見上げると泣いている人が何人もいた。訳を聞くと叱られた。怖くて家にとんで帰った。

半藤一利を「偲ぶ企画」で「八月十五日」を読み、私の八月十五日が鮮やかに甦ってきた。

玉音放送ききは幼き暑き夏

防人の歌また読み返す

読者のひろば



「孫とともに」

古川久次

私には、三人の孫がいます。長男夫婦には今年大学生になる女の子が一人います。お陰さまで無事志望校に入学ができて、学生生活を送る最中です。新型コロナウイルス対策でオンライン学習も取り入れての生活になるようですが元気に過ごしてもらいたと思っています。次男夫婦には三才の男の子と一才になる女の子の二人がいます。下の子はハイハイから立ち歩きまで、進む早さは本当に目を見はるものがあります。保育園児の上の子も言葉をはっきりと言える様になり、妹の世話をするまでになりました。二人とも笑顔がとても可愛いです。孫の成長が私たちの希望と元気の源となっています。

「ひとこと」

受川則子

今から五十年前の話、六十才を過ぎた庭師が毎日、おにぎりを持って中島から通っていた。お酒が好きで昼でもコップ一杯、旨そうに。おにぎりではつまみにならないから、つい和え物とか酢の物とかを出す。と、話はずんで「奥さん、松葉拾おうぞ」。松の木は五、六本あるから落ち葉が散り敷く。庭のことは

主人の担当だから、わたしや知らんわと思っていたが、主がはやばやと西方へ旅立ってしまったから、すべて私の担当となった。草むしり、水やり、植え替え。初心者で自己流に二十余年。今、芽吹きのおもしろさ、蕾の開花を待つゆとりを感じられるようになった。「松葉拾おうぞ」の一言が、私の庭仕事の原点である。コロナ禍の中、時間を気にすることなく松葉をひろっている。

「私の趣味」

鴻野俊雄

私は鉄道模型を作って走らせたり、鉄道グッズを集めるのが何より楽しみです。

父は蒸気機関車等の運転士をしていました。思い起こせば、幼い頃から汽車の玩具をたくさん買ってもらいました。小学校1、2年生の時には汽車の運転士に憧れるようになりました。

後に自分も国鉄に入社すると、記念キップ・入場券や時刻表などを集め始めました。

そして40年ほど前から自宅で鉄道模型、いわゆるNゲージ・ジオラマを大きな板の上で作り始めました。プラレールの虜だった小学1年の孫も、今では私と一緒にNゲージで楽しんでいます。

「愚直」

室屋 佳子

市立図書館の壁や柱に書画が展示されている。カウンターの手前にはライフラインの絵、新聞コーナーの奥には李白の詩、雑誌コーナーには芭蕉の句。日によって目に入るものは異なる。5月が近づくと「でか山」の絵が目に入り、図鑑コーナーに寄った日は、「楽」という字が本を読む楽しさを思い出させて

くれた。最近、帰り際に新刊コーナーの柱を振り返るようになった。「愚直」、いい言葉だなと思う。縦書きで、一番下の線が道に見える。平坦ではない道だ。愚の字の点々は足跡に見える。どれだけ歩き続ければこのような独自の筆致、独自の世界に辿り着くのだろうか。立ち止まらずに、歩いてみよう。諦めずに歩みを続けてみよう。そう思い、もう一度振り返った。

読者のひろば



「音」

田治 俊孝

電池が切れ、ひと夏を腕時計なしで過ごした。手首は蒸れずさわやかだったが、秋が来てさすがに不便を感じ魚町の時計店へと走った。

「こんちわあ」「いらっしゃい」奥から老店主が出てきた。電池と不具合なバンドも替えたいと伝えると、電池を替える間にバンドを選べと言う。カウンター横に秘密めいた囲みがある。店主がそこに消えると仕事が始まった。しばらく

くして「バンドはどれにします」「じゃこれに」店主ふたたび隠れる。シャラシャラ、小さい部品でも探しているのだろうか、トントンド打つ音もする。「これでどうです」「少しゆるいね」店主また籠もる。シャラシャラ、トントント。時おり表通りを吹き抜ける風がカタカタと店のガラス戸をゆらす。子供らの自転車が遊び去るとまた静かになった。「今度はどうです」「びったりやね」。

時計はなおったが、いつまでも座っていたい店先だった。



「石動山秋景」

寺野時雄

石動山の自然は素晴らしい。特に山頂から見る秋は、峰々が赤や黄色に染まる大パノラマの正に絶景。

この様な錦織りなす絶景は誰が……。そうだ、秋を司る美形の女神「竜田姫」に違いない。

「竜田姫」に会いたい、お話がしたい、出来ればお友達に、そんなアホなことを考える秋の夜長でした。

伊須流岐の峰を錦に竜田姫

子どもの本を読む会

代表 古田秀雄



今年二月、読書会でミハエル・エンデの『モモ』を取り上げました。この物語のテーマは「時間」です。そこで重要なのは「機械的に計る時間」ではなく、私たちの「心の時間」、人間らしく生きる時間こそが大切だということを読み合いました。

それぞれ見つけたものを、自分だけのものとせず、参加者全体の「宝物」として、共感し日常に活かしていきたいと考えています。

又、やさしい絵本の時は一人一ページずつ、声に出して輪読するのも「子どもの本を読む会」の楽しみのひとつです。

活動のあらまし

一九七九年(昭和五四年)結成

現在会員 一〇名

毎月 第二木曜午後二時

最近読んだ本

『車のいろは空のいろ』

『どうぶつえんのおいししゃさん』

『ぼくはイエローでホワイトで、ちよつとブルー』

『くまのプーさん』

秋のクッキング

愛媛の風物詩「芋炊き」

「もうできとるけん、食べさいや」「じゃあ遠慮なくよばれらい(いただきます)」「おう、これはうまいわい」

月の美しい夜、家族が里芋など野菜の煮物の大鍋を庭先で囲む。おにぎりやお団子、季節の果物も添えて。大人たちは酒を片手に陽気に語り合い、早々にお腹が満ちた子どもたちは暗い中駆け回っている。

私の故郷、愛媛南予地方では、秋の収穫祭とお月見を兼ねた「芋炊き」が9月～10月の恒例行事である。川原には花見のような宴席ができ、職場や友人仲間であいまいやることもあった。七尾に来たからは家で密かに土鍋でコトコト。

今は会えない家族の顔を思い浮かべつつ、乾杯! (さかいじゅんこ)



お知らせ

□「友の会のつどい」と「ちょ図ボラ」は現在休止中です。9月30日、石川県まん延防止重点措置が解除されましたが、状況を見て再開する予定です。皆さんのご協力をお願いします。

□能登地区・本を読む仲間をつどいが10月17日(日曜日)に志賀町立図書館で開かれます。題材となる本は「森嶋外・高瀬舟」「芥川龍之介・杜子春」「泉鏡花・義血侠血」の3作品です。

この人

七尾出身・四人の漫画家

七尾出身の漫画家が四人もいるのをご存じですか。今回はその方々を簡単に紹介してみましよう。

彩花(あやはな) みん

代表作は「赤ずきんチャチャ」。これを見ると昔流行った「アラレちゃん」を思い出します。絵も可愛い少女ギャグ漫画です。

橋本ゆうすけ

代表作は「あらいどぎ」。新井和時は学生だが正体は弱い妖怪。平穏な学園生活を送ってきたが、転校してきた天使・聖美春のせいで命を狙われることに……。学園ものの少年漫画です。

宮下英樹

ジャンルは格闘技・歴史

もの。代表作は「センゴク」シリーズです。ルイス・フロイスの「日本史」や織田信長の生涯を書いた「信長公記」など歴史書を探究し、合戦跡や城跡の探索を通じて、積極的に新説も取り込んでいるそうです。絵も迫真そのものです。

乃木坂太郎

平成十六年に「医龍・チーム・メディカル・ドラゴン」で小学館漫画賞を受賞しました。ジャンルは青年向けとなっていて、絵は相当リアル、気の優しい方には毒な場面もあります。完成度の高い作品となっています。

紹介した漫画家の作品のいくつかは七尾市立図書館の、ふるさとコーナーにあります。

